

# イラクの日々と現状

—イラク人を考える—

高橋 英彦

## はじめに、私とイラク

商社勤務時代のバクダッドへの赴任は、1975年の7月であった。ペイルートからのイラク航空便からタクシーを降りると、天地が炎の中にゆらめくような熱さであった。摂氏45度は優に越えていたであろう。

1970年代は、多くの産油国が石油を外国資本の手から国有化した時代である。世界の需給不均衡への警戒感から原油価格が著しく高騰し、石油危機時代とも呼ばれた。そして日本など非産油先進諸国は官民あげて産油

国に接近して自国の産業と民生のために石油の安定供給を得ようとし、その一方で産油国の駆け足の国づくりのための大型プロジェクトや商談をめぐる国際競争に鎬を削ったのである。円貨換算1000億円のプロジェクトも少なからずあった。

その時代、私たちはこれら産油国の湧きたつような民族主義意識の高揚を肌で感じ、さまざまな交渉ごとにおける高姿勢としたたかさに悩まされた。交渉の場で、「否」と言つて席を立つことが出来たらどんなに胸がすっきりとするであろうか、とは私たちが何度となく考えたことであつたが、「石油」を握られている以上、容易には

「ノー」は言えない時代でもあった。

ともあれ、それは頭に白いものが増える日々の連続であつたが、反面、同僚ともどもビジネスマンとしての充実感を抱ける歳月でもあつた。

一方消費生活はまだまだ不便が多く、気候の激しさとあいまつて、同伴の家族にとっては苦勞多い日々でもあつた。

しかし、イラクの回想は、砂漠のように厳しく乾いたものだけではない。オアシスのような心の安らぎもある。それは、イラク人との多様な出会いの中にあつた。

特に仕事のない休日、私はしばしば写生に出かけた。イスラム教の国の多くがそうであるように週の休日は金曜日である。早朝に出かけて砂漠の道を走り、遺跡や風物と相對する。気候風土から考えれば、決してらくな趣味ではないのだが、おそらく写生への没頭が、私のストレス解消の最良の薬であつたように思う。

そのような写生行で出会つたイラク人たち

—アラブであろうと少数民族であろうと、町の人であれ農民であれ遊牧民であれ—の親切は、あとにもさきにも

も経験したことがないほどのものであつた。アラブ遊牧民にはもともと外来者をわが身にかえても守るといふ掟があるというが、チグリス・ユーフラテス両河の恵みのおかげで農耕民が多い国イラクでは、祖先からの伝統的な砂漠の民の氣質と、農民的な穏やかな性格があいまつて、あの純朴な温かさがにじみ出てくるようにも思つた。

親切の一例をあげよう。道ばたで写生をしていると、見知らぬ人から椅子を提供され、場合によつては机も出てくる。冷たい水、紅茶またはコーヒーがふるまわれ、場合によつては食事に招かれてしまう、などなどである。

このような温かさは、見知らぬ人びとだけではない。仕事の上で私の白髪を増やしてくれるような、おおむね役人である交渉相手の中にも、仕事を離れると、なんとも愛すべき、親切で善良な普通のイラク人が少なくなかつた。

そんなバクダッドでの暮らしの点景も思い出す。

妻の買物につきあつた野菜市場で聞く、近くのモスク(寺院)から夕空に流れるコーランの詠唱。友人たちと酒を酌み語りあつたチグリス河畔の夜。月のかかるナツメ

椰子の葉がサワサワと音をたてていた。

## 1 建国から「悪の枢軸」への道

1921年6月23日、ムハンマド（マホメット）の後裔であり、聖地メッカの太守であるハシム家のシャリーフ・フセインの息子であるファイサルが「イラク王」として、港町バスラへ上陸した。

ハシム家が、長く中東の支配者であったオスマントルク帝国に対して反旗をかかげたのは1916年、第一次世界大戦のさなかである。大戦においてドイツの同盟国であったトルコとの戦いは、言うまでもなく英国の誘いに応じたものである。

ファイサルの軍勢は、1918年秋に今日のシリアの首都ダマスカスに入城した。アラビアのローレンスとして知られる英軍連絡将校T・E・ローレンスが同行していた。

このトルコに対する「アラブの叛乱」の代償として、英国はハシム家にダマスカスを都を置くアラブの国を約束

した。しかし、この約束は、別途かわされていた英仏間の協定によって反古にされ、戦後処理の中でシリアはフランスの委任統治下におかれた。英国はまた、ユダヤ人の戦争協力への代償として彼らの遠い祖先の地パレスチナにユダヤ民族国家（民族の家 National Home for Jewish Peopleという表現）を創設することを容易ならしめるため最善の努力をするという宣言を行っていた。

そして英国は、シリアの代わりに、同じくトルコ支配を脱したチグリス・ユーフラテス両河流域と周辺地域にファイサルの王国を建設することに同意し、英国委任統治下においてバグダッドを都とする「イラク王国」を誕生させたのである。（完全独立は1932年）。また、同じハシム家の兄弟アブダラーのためには、英国委任統治下でトランス・ヨルダン公国が建てられ、のちにヨルダン王国となった。

両王国は、第二次世界大戦をはさんで英国の強い影響下で存続した。しかし1950年代に、アラブ民族主義の高まりの中のエジプト革命が契機となる連鎖反応の嵐のひとつとして、1958年にイラクで起きた革命に

よってハシム王家は三代で倒れ、共和制に移行した。ヨルダンでは四代目の国王の下に、今も王制が続いている。

イラクでは革命を指揮した軍人の政権が2度にわたってクーデターで倒れ、1968年にはアラブの復興を標榜するバース党が天下を握り、事実上の一党政治が今日まで継続している。

1972年に行われた石油の国有化と価格高騰、そしてその大きな収益による国づくりの促進については、さきに述べたとおりである。開発については、インフラ整備、農業開発、工業開発の均衡をとることに留意し、教育や医療など人間に対する投資にも力を入れ、少なくとも70年代の半ばから後半にかけてまでは、比較的賢明な方向に進んでいた。けれども、80年代にかけて、政権は独裁者が陥りやすい危険な道を、国民を巻きこんで進みはじめてしまったのである。政権の実質的な指導者は、70年代なかばから革命評議会副議長(79年に大統領就任)サダム・フセインであった。

イラクは1980年にイランとの戦争を引き起こし、88年によりやく停戦が成立したが、90年8月にクウェー

トに侵攻占領した。これに対し、翌年1月には米軍を中心とする多国籍軍が空と陸からの軍事行動を起こし、翌月にはクウェートは解放された。湾岸戦争と呼ばれる。

この2度の戦端をイラクの独裁政権が開いた理由については、実利と覇権主義の組み合わせの中の諸説がある。また、湾岸戦争については、米国をはじめ参加各国(兵力参加のみならず、日本のような資金拠出国も含む)に、それぞれの国益をふまえた思惑があるが、結果として隣国クウェートに対する侵略行為が排除されたことは評価される。また、イラク国内の少数民族であるクルド人や、イスラム教スンニー派主体の政権による同シリア教徒に対する人権侵害・迫害の実態が国際社会の注目するところとなり、これを抑制する手だてがとられたことも評価されていい。

そして国際社会は、クウェートからの敗退後もイラクに対して厳しい態度で臨んでいるが、それはこのような人権侵害とともに、大量破壊兵器開発の疑いがあることによる。

国連安全保障理事会は、1990年から石油輸出禁止、

海外からの投資などの経済活動禁止を課し(ただし人道物資購入費用に充当される石油の輸出に限って段階的に緩和)、また大量破壊兵器疑惑についての査察を強く要求してきた。この要求に対して、イラクは今日まで十分な受入れを実施していない。

また、化学兵器については、イラン・イラク戦争のさなか、イラン国境に近いザグロス山中の美しいクルド人の村、ハラブチャに対して使用し、無辜の老若男女多数が犠牲になったという痛ましい出来事が報道された。「美しい村」と形容詞をつけたのは、1970年代の在勤中に、ハラブチャ周辺へ出かけたことがあるからで、このニュースに接して、あの美しい山村の、昔ながらの平和な暮しが一瞬にして無残に破壊されたことに強い憤りを禁じ得なかつた。

大量破壊兵器については、査察要求に対する誠意のない対応に国際社会はいら立ちをおぼえているが、その中で米国は、イラクを「悪の枢軸」国と位置づけ、サダム・フセイン政権を軍事力をもってしても倒すという姿勢を鮮明にしている。そして米国内強硬派はイラクが核兵

器を開発保有する以前に、行動を起こさなければ世界の脅威となることは必至としている。また、過去20余年の間、サダム・フセイン政権の動きを見てみると、かかる手遅れ防止論にも説得力を感じないわけにはいかない。しかし、国連の名において求められる査察をめぐるイラクの今後の対応を見極めるという段階を経て、アラブを含む国際社会の歩調を合わせて、武力行使にしろ平和解決にしろ次の手段に訴えなければ、世界情勢のさらなる混沌を招く危険がある。

ともあれ、過去20有余年独裁政権が行ってきた統治は、国民にとつても、国際社会にとつても、決して好ましいものではない。せつかくの有数の石油資源を国民の生活上に寄与させるといふ努力を、1980年以降放棄してしまい、イラクという国の主権を越えても国際社会が介入せざるを得ないところまで人権は侵害されてきたのである。

それでもなお、国の内部から政権崩壊の兆しが無いのは、強大にして恐るべき秘密警察組織の存在と、巧みな情報操作のおかげである。

あの善良で温かい一般国民が、一日も早く圧制から解放されることを望んでやまない。

国際社会は、国際の平和の維持という世界益とイラク人の人権擁護と生活の向上という公益との間で、独裁政権との対応を協議していかななくてはならないのである。

## 2 歴史のイラク

### Mesopotamia yesterday Iraq Today

これは1970年代にイラク情報省が発刊した、同国を紹介する書物の題名である。

ちなみにメソポタミアとは、ギリシャ語のメソ(中間)ポタム(川)、つまりチグリス・ユーフラテス両河の間の土地を意味する。アラビア語ではラフィデーンという。

今日のイラクは、トルコ帝国時代南からバスラ、バグダッド、モースルの3総督統治地域であり、古代メソポタミアとその周辺つまり西方に広がる砂漠と北方のけわしい山岳地帯を加えたものである。

人口は、両河流域が多数である。

両河流域は、古来砂漠や荒々しい山岳地帯の民にとつては、住みたい、手に入れたい垂涎のまゝであり、長い歴史の間に、東のペルシャ高地や西と南の砂漠から、幾重もの民族の波が押し寄せ、多くの場合文明度の高い流域の民を打ち負かし、支配者として居住したのである。したがって、住民は長い歳月に混血を重ねたはずである。

5000年の昔シュメール文明を築いた人びとについては、まだ多くの謎に包まれているが、その後の幾重もの民族の波は、南と西からの主流であるセム語系と、東方あるいは北方からの主流であるインド・ヨーロッパ語系(印欧語族)に大きく分けることが出来る。たとえばシュメール文明の栄華のあと、紀元前2500年頃からアッカド、アッシリア、バビロンなどの帝国を築いた民族集団はセム語系である。旧約聖書のもっとも古い時代の舞台も両河流域といわれ、たとえばノアの方舟で知られるような大洪水の生々しい痕跡は、バグダッドの南100キロのキシユという遺跡の地層に見ることが出来るし、シュメール時代の文章の中にも、すべてを押し流した洪水のあと、王権はキシユに下つたと記されていると

いう。イエス・キリストの言葉も古いセム語のひとつであり、ユダヤ人も、セム語系である。

これらに対して、ペルシヤの民は、北方から進出したインド・ヨーロッパ（印欧）語族である。

ペルシヤ高原に興きたアケメネス朝は、紀元前539年にバビロンを奪取してメソポタミアに覇権を築いたが200年ののち、アレキサンダー大王に敗れて滅亡した。アケメネス朝が滅んでおよそ500年ののちにはササン朝ペルシヤが興き両河流域を広大な版図に加えた。

今日、中東から南アジアにかけて分布している印欧語族はイラン人、アリア系のインド人、パキスタン人、アフガニスタンの諸民族、クルド人などである。

クルド人の歴史はよく分かっていない。

おそらく2500年くらい昔から、現在クルディスタンと呼ばれる山地に住みつき、各方面からの侵略に耐えて伝統を守り、一般に勇敢な尚武の民とされる。今日人口はおよそ2000万人余といわれるが、19世紀から20世紀にかけて居住地域とかかわりのない国境設定が行われたのでイラク、イラン、トルコ、シリア、旧ソ連

に分断され、そのいずれの国においても少数派であり、イラク以外ではトルコでも幅広い自治を求めている戦いを続けている。

思い出す。北イラクのアルビルを訪問したとき、おりしもクルドの春の祭典の当日であつたが寒風が吹き冷たい雨が降りしきつていた。そのためにやや寂しい風情の祭りの中で、若いクルドの女性がぼつりとつぶやいた。「この雨はクルドの涙です。」

さて、南のアラビア半島から砂漠を越えて北上し、ササン朝ペルシヤに大勝して両河流域の覇を唱えたのが、セム語系最後の大きな流れといえるアラブ人である。

今日のサウジアラビアのメッカにムハンマド（マホメット）が生まれたのは570年といわれ、神（アッラー）の使徒として教えを説き、イスラム教を奉じる軍勢がアラビア半島から北上してペルシヤ軍を破り、「アラブ」が歴史の舞台に躍り出たのは7世紀の前半からなかばにかけてのことであつた。

イスラム教徒はグマスカスにウマイヤ朝を樹立し、その版図は北アフリカからイベリア半島にも及んだ。そし

て、ウマイア朝を倒したアッバース朝は、バグダッドに都を定め、その勢力は唐と国境を接するまで東方へと拡大した。両王朝とも王は、政教一致の頂点に立つ聖なる君主として教王（カリフ）と称した。

「9世紀は、世に名高い二人の皇帝とともに明けた。西のシャルマーニユ、東のハルーン・アル・ラシードである。もちろん、東の皇帝のほうがより大きな力と、より高い文明を代表していた」と、アラブの史家ヒッテイは記している。二帝は使節を交換した。記録によれば、教王はシャルマーニユに織物・香料・象を贈った。バグダッドには国際色豊かな交易都市の繁栄があった。あの船乗りシンドバッド（実際にはむしろ貿易商）は、バグダッドの大尽暮らしに飽きると海のシルクロードの冒険に富む航海へと船出して行った。

当時のバグダッドに比肩する王都はシャルマーニユのパリではなく、唐の長安であったと思う。

しかし、アラブの史家はハルーン・アル・ラシードの孫の治世をアッバース朝黄金時代末期と見做している。9世紀のなかばである。そして、その後しばらく中央ア

ジアから中東に進出したトルコ系王朝の威勢の中でなんとかアッバース朝教王の名を保ったが、モンゴルの襲来によって名実ともに滅亡した。バグダッドは破壊しつくされた。「チグリスは始めに大量の血潮によって赤く、つづいて投ぜられた膨大な蔵書のインクによって黒く染まった」という。1258年の1月である。

教王（カリフ）も殺されたが、命拾いをした家系の貴人がカイロの王（スルタン）に迎えられ、カリフとして遇された。10世紀頃から、アラブ世界の栄華の中心は、カイロに移っていた。「千一夜物語」も舞台をカイロに変える。

バグダッドは、モンゴルのイル汗国の支配を受け、1410年にはティムールの大軍によって蹂躪され、さらにアゼルバイジャンなど北方の王朝やサファヴィー朝というペルシャ人の王朝に統治された。サファヴィー朝の栄華は「世界の半分」と自讃し、今もイランの有数の観光地であるイスファハーンで知られる。

17世紀にバグダッドを占領したのは、オスマントルコのスレイマン大帝である。大帝はハンガリーを従属せし



め、ウィーンを包囲したことも名高い。そして、トルコ支配は第一次世界大戦まで続くのである。

トルコ領イラクは、いわば帝国の一边境にすぎず、荒唐が広がっていた。

古くから栄えた港町であり、あのシンドバッドも船出したバスラを、1885年に訪れた探検家スウェン・ヘーデンは、そこは見る影も無く凋落した小さな町で、夜にはジャツカルやハイエナが狭い街路をうろつくほどであったと書いている。バグダッドにしても似たような状態であったであろう。

アラブ人の王国イラクは、700年にわたる外国支配と長い沈滞の末に誕生したのである。そして、ゆっくりとした歩みではあるが、少しずつ昔日の繁栄を取り戻し始めたのであった。

たとえばバスラは再び湾岸（ペルシャ湾と呼ばれるが、アラブ諸国はこれを嫌う）交通の要衝となり、1920年代から30年代にかけては湾岸唯一の空港が造られ、紀元2600年の記念飛行途次のわが神風号立ち寄りの記録もある。

### 3 遺跡と砂漠の旅から

南メソポタミアには泥土以外の建材はほとんど存在しなかった。両河のほとりに茂るなつめ椰子の幹は、せいぜい天井の梁くらいしか使えない。人びとは土を固めて壁を築き、やがて煉瓦を焼く技術を開発した。私たちのバグダッドの家も煉瓦造りであった。

このような建材事情ゆえに、古代エジプトやギリシヤ文明のような豪壮あるいは華麗な遺跡を残していない。

古代メソポタミアの建造物は土に還り、土に埋もれた。神殿も王宮も町なみも、テルと呼ばれる小高い盛り上がり（遺丘）になり、後世その近くに住む人びとはその上に住んだり、煉瓦などの建材を採取したりした。あのバベルの塔も「夥しい数の煉瓦を、長い歳月の間近くの町や村に恰好の建材として提供しつづけた」のである。そして今は大きな土台部分を残すのみである。

ところで、バベルの塔とは、紀元前600年代から500年代にかけて栄えた新バビロニアの都の神域に聳立

していた聖塔（ジググラト）である。古代メソポタミアの都市で聖塔がひときわ高く聳えていたことは、それがテルの中心であることでも分かる。

名高い聖塔のある遺丘のひとつにウルがある。19世紀のなかばにユーフラテス川から20キロほど離れた寂しい砂漠のこの遺跡を発掘した英国人は、出土品によつて、ここが旧約聖書にいう「カルデア人のウル」だと知るのである。

そして第一次世界大戦後の1927年から、英国の考古学者レオナード・ウーリイが、この「アブラハムのふるさと」の本格的発掘を開始した。ウーリイ隊は、都市や王墓を発掘して遠い昔に光をあてたが、そこで発見した数多くの殉死者の中に、女王の墓で堅琴を弾く男がいた。「彼の腕は、今にも壊れそうな楽器を抱いていた」とウーリイは書いている。この官廷楽士は4000年間、愛する楽器を抱きつづけていたのだ。

今日のウルは聖塔だけが修復され、シュメール都市のなかでもっとも多くの人びとが訪ねる遺跡となり、かつての寂寥はない。

私も冬の休日つづきの家族旅行で訪れ、その夜はユーフラテス河畔の町ナシリーヤの宿に旅装を解いた。小さな宿で夕食は用意出来ないというので、星をいただいて町のレストランに出かけたのだが、ちょっとした問題が発生した。ただ一軒開いていた店の主人が、私と息子は入れるが、妻と娘たちは駄目だと気の毒そうにいう。「こは男のレストランだよ」というのである。まだ幼かった子供たちはいかにも空腹の様子であった。そこで宿に戻つて頼みこむと、宿の支配人らしい男性が、なんとか食事らしいものをこしらえてくれたのである。

バグダッドでは経験がないが、地方ではイスラムの伝統にのつとつて、男女別々の食事という世界があった。ウルと同様に名高い遺跡のひとつにウルクがある。ユーフラテス沿いのサマワという小さな町から東へ51キロほど入った砂漠のただ中にあり、こちらは訪れる人もごく限られている。

ある秋深い休日、草原をひた走り、不毛の荒野に入るあたりから古代都市ウルクの市域らしい。広大な遺丘のひだを抜けて、番人小屋に達する。番人に紅茶（チャ

イ)をふるまわれた。バスラでフランスの会社が建設中の製鉄所で下請けとして働いているという4人のポーランド人技師が先客だった。また訪問者帳をめくると、肥料プラント、港湾工事、通信プロジェクトなどで働く日本人の名前があった。

私は画帳をかかえて大きな聖塔跡の丘にのぼり、さらに遺丘をめぐった。一羽の鷲が舞いあがり、一匹の野獣が駆け去った。狐だろうか。それにしても大きい。

ウルクの最盛期は紀元前2500年頃の第一王朝時代とされるが、ここには前後3000年にわたり、人びとの暮らしが営まれていたのだという。今は大地に戻り、沈黙と風の音のみが支配する。

このウルク行の帰路、サマワとの中間の草原(雨のあとと草原になるが、一年の大半の乾季は褐色の不毛の大地でしかない)で、遊牧民の黒い天幕群を訪ねた。

ちょうど夕暮れで、遠くラクダを追っていた男たちも、より近くで羊を追っていた子供たちも戻って、天幕の周囲は一日でもっとも活気溢れる頃である。忙しい中、チャイをふるまわれたり、同行の小学生の息子がラクダ

に乗せてもらったり、私たちは得がたい経験をした。

黒い天幕と書いたが、山羊や羊の毛でこしらえる。実際の色合いはやや濃い褐色である。多くは3本か4本の柱で支えられ、向かって右から台所、女部屋、そして敷物をしいた居間に分けられる。これが住居であり、暮らしはラクダと山羊や羊に負うところが大きい。暮らしぶりは単純で力強く、定住者には想像出来ない厳しさがあ

る。

このようなアラブ遊牧民をベドウィンと呼ぶ。これは英語である。砂漠を意味する語彙のひとつにバーディアがあり、そこに住む人がバダウイ、複数がベドウである。

ベドウィンの暮らしは、都市はもちろん農村の生活と比べても、現代文明の恩恵に浴するところがすこぶる少ない。しかし、私が知る限り、この遊牧の民の暮らしぶりを野蛮だと嘲つたりする人に出会ったことは無い。バグダッドの役人である知人はこう言った。「私の友人たち、医者や弁護士や技術者の多くが砂漠に愛着を抱き、砂漠の星空や砂漠の匂いが好きなのですよ。」イラクの絵画展などでは、砂漠、ベドウィンとその馬をテーマにし

たものが少なくない。

ベドウィンの生き方にこそ、遠い祖先の姿が彷彿とされるという人もいる。ベドウィンこそ、本来のアラブと  
言う人もいる。

今日、アラブとかアラブ世界という概念は人種ではなく民族としてとらえるべきであろう。特にその定義のよつてきたるところはアラビア語の使用である。アラブ人の移住や征服などによって、広い地域でアラビア語が用いられるようになった。そして土着のものと混りあいながらアラビアの文化文明も根付いた。

今日、アラビア語を主たる言語とし、その文明を分かち合う国およびその住民の多くがアラブという言葉でくくられているものと考えていいであろう。これを広義のアラブとすれば、ベドウィンは狭義観念のアラブなのである。

ところでセム語系の人びとの幾重もの波が南のアラビア半島からメソポタミアに達し、その最後にイスラム教を奉じたアラブ人があらわれたということは、前にも述べた。

セム語族の波の中には、アラブ以前にも遊牧民の民が少なくなかったはずである。

旧約聖書の民も同様なのだ。アブラハム（アラビア語ではイブラヒム）の一族も、メソポタミアの曠野で遊牧の生活を送っていたと考えていい。

「エデンの園」はどこであったのかについても、イラク国内にいくつかの「候補地」がある。そのひとつはチグリスとユーフラテスの合流地クルナである。両河はここからとうとう滔々たるシャトールアルアラブの流れとなる。クルナの茶店に一本のリンゴの木が植えられていたのは、ご愛敬というべきか。

### おわりに

現実に戻ろう。

この稿を書いている日、イラクは大量破壊兵器査察の無条件受入れを国連に対して表明した。これで米国主導の武力行使は正当化されない、とイラクの副首相は言明している。

このイラクの動きを従来もしばしば行ってきたような時間かせぎの欺瞞とみるにせよ、国際社会の流れに一步近づこうという進展と評価するにせよ、背景としては米国の力の威嚇がある程度効を奏したものと考えていい。私は決して早急な武力行使に賛成するものではないが、力の外交の効果を認めないわけにはいかない。そして、査察に対する実際の対応の仕方によって国際社会の良き一員でいられるのか否かが問われている。

さらに、なんとしてもフセイン政権を倒して国際秩序にきちんと組み込まれるような政権が樹立されなくてはならないという米国の主張についても、イラク自身の動向が最後の決め手になる。

そして、私たちは国際社会の一員として、平和の脅威を取り除くとともに、少数民族も含む2300万余のイラク国民すべてが望ましい暮らしを期待出来る環境の実現にも関心を払わなくてはならない。望ましい暮らしとは、安全が保障され、自由と人権が守られる中で、生活の向上がはかられることである。それは、いわば人間益ともいうべきものであり、生活の向上は経済面のみでは

なく医療や教育のような社会サービスを充分に受けられることを意味する。このようなすべての人びとに共通の人間益への寄与は、活動としての公益そのものと言っていい。

イラク人の歴史は、本稿でその一端をのぞいたことでも分かるように、長くて複雑な民族の対立と融合の繰返しであった。その中で無類の善良さと、すこぶるしたたかな国民性も培われてきた。

その人びとの多くが、前にも述べたように政権による情報操作と抑圧によって、独裁政権への盲点的な服従を余儀なくされている。従って暮らし向きが苦しくても多数の人びとの政権への不満が私たちが考えるより小さいのかもしれないが、より大きな自由を謳歌し、その中で生活の向上を目指す権利がある。

## 附記

中東のイスラム教国から帰国した頃、しばしば受けた2つの質問がある。

ひとつは、「酒は飲めないのか」という問いであり、もうひとつは「女性は人前に顔を見せないのか」つまりすっぽりと全身を覆う衣（アバーヤという）をまとい、顔を布で隠しているのかという疑問である。第2の問いは、女性の地位や社会進出についての関心へとつながる。

こうした問題についての政策はイスラム教国でもまちまちである。信仰に伴う戒律というものは、それぞれの時代背景の中で生まれたものであり、価値観やライフスタイルの移り変わりにつれて変化しても不思議ではない。しかし、一方では厳格に守つていこうという考え方があつてもおかしくはない。

飲酒については、イラクはまったく自由である。なつめ椰子を原料とする地酒アラクや千一夜物語にちなむシエヘラザードという名の国産ビールは人気があつた。一方、憲法すら成文化されず、イスラムの戒律が法である隣国サウディアラビアでは、飲酒を厳しく禁じている。

女性の地位や社会進出についても様相はさまざまである。

こんな経験がある。ペイルトからサウジアラビアの首都リヤドへ飛んだとき、出発時には服装が色とりどりであつた女性客の大半が到着時までには黒のアバーヤに全身を包んでしまつていた。

サウジアラビアをはじめ古くからの戒律重視のイスラム教国では、女性の社会進出の実現にはまだまだ時間がかかりそうである。お隣のクウェートでは、1999年5月に女性参

政権を認める首長令が発布されたが、同年11月には国会がこれを否決した。湾岸のアラブ諸国で女性が参政権を得ている国はない。

イラクの場合、農村や古い町では伝統的なアバーヤ姿の女性も見かけるが、私が仕事で会つた人びとは普通の「洋装」で執務していた。仕事で訪問する先は役所が主であつたのだが、相当の責任あるポストの女性もいて、てきぱきと仕事をこなし、なかなか難しい交渉相手でもあつた。

帰国後在日イラク大使館との交渉ごとで男性の書記官相手からちがあかず、代理大使であつた女性外交官との話合いを持ち込んで、たちどころに結論が出た記憶もある。思い切りのいい人だつた。

役所における女性の進出は、日本と比べてもまだ比率は小さかつたが、登用された人は、男女まったく区別なく力を発揮していたように思う。

ただ、このような社会進出と、日常生活における風習あるいは因習とは別であることも知つておいていいと思う。たとえばイラクで知人の慶事や弔事に出席したことがあるが、いづれも男女は別室で参加した。もつともある弔事の折に、私の妻ははじめ女性だけの部屋に招き入れられたのだが、途中から夫である私と同席という扱いに変わった。これは非イスラム教徒の外国人ゆえの配慮であつたようだ。